

# 幼稚園と小學校の聯絡

倉 橋 惣 三

幼稚園は必ずしも狹義の小學校豫備教育ではない。しかし、家庭教育を補ふて、國民の幼兒期教育に當る以上、小學校との密接の關係にあるべきは言を俟たない。その教育の効果は、小學校への就學に好條件をもたらすものであるに相違ないし、小學校は、幼稚園保育終了者を、最も喜び迎ふる筈に相違ない。たゞ從來此點に於て、往々にして、餘りに神經質的な小節論が行はれたり、甚しきは、幼、小對立的粗野の論議が投げ出されたりしたこともある。敢て氣にかけるべきでもないが、相隣接する教育の各分野に於て、親睦の情意の不足するものがあることは、ぎつちの爲さいふことよりも、子ぎものために遺憾なことが生じ易い。世間の空論家や漫論者が、幼稚園の利害なぞを、ロク／＼幼稚園を觀たこともないで暴言するのは、さうでもいゝとして、苟も小學校教育者にして、幼稚園に對する無理解の素人論を濫にする如きは、最も慎むべきである。

しかも、吾人が茲に語らんとするのは、そうした客觀的批判的問題としてではない。幼稚園が折角く自ら保育したるその効果を、小學校に對して、如何に充分表はしるるや否やさいふ點である。國民教育に入るに先立つて二年なり一年なり三年なり、家庭以上の教育的理解性を以てその子を保育し又、研究し來れるものが、それを小學校の教育に有効に役立てなかつたならば、その責務を充分に果せるものさはいひ難いであらうさいふ問題である。

幼稚園が保育機關であると共に、個々幼兒の研究機關であることは更めて言はない。又保育そのことゝしても、必ずしも數年にして一人々々完全に保育効果を擧げ得る者のみとも限らないであらう。即ち、よくして小學校に送るさいふこと一方に即せずして、よく知つて小學校に參考に供すさいふことの任務をも、大に負擔實行すべきである。

而して、これが爲に、種々の方法を機會があり得るのであるが、就學の時期は、その大切の時機、少なくとも、その端緒につくべき時である。小學校は、その新入學兒童の健康、個性、家庭の狀況等に就て、最も早く知ることを必要とし、又知りたがつてゐる。之れが爲に、一方兒童の觀察のために苦心し、又一方家庭調査に苦心する。しかも、親は必ずしも兒童の教育的觀察者ではなく、小學校の調査上の要求に對して、適當なる答辯者たり得ないことが寧ろ普通である。又、それが無理のないことである。そこで、小學校は、何人かゞ豫備調査に當つてゐて呉れば最も便利さるのである。幸にして、それに當つてゐるのが幼稚園である。

たゞ實際上として、この當然の任務を、幼稚園をして負擔せしめざるにも理由がないとはしない。その一つは、幼稚園自らの、幼兒觀察に關する自信の乏しきことである。他の一つは、その申送りに對して、小學校が果して正しくそれを受取るか否かに就ての安心の薄さである。この二つは遺憾ながら今日の事實でありそうである。

先づ、幼稚園に於ける此點の自信の乏しきことは、幼稚園保育者に科學的訓練の少なきに基づくのであつて、大に充實を要する點である。多少低格的、又異常的なる兒童の保護教育にあつては、所謂サイコロヂストの専門的鑑査に俟つことが普通とされてゐるに拘はらず、普通兒童の場合に於ては、極めて常識的、或は常識の名に於ける非常識的鑑別に過ぎない。知能の査定は簡單ながら行はれるとして、性格の鑑査に至つては、甚だ粗漫なる識別と表現とに止まるのが常である。

第二に、小學校の受取り方に對する不安心は、折角くの正しき通告が、教育的基礎資料として取り上げられる前に、その子の價值評價の材料として、擔任教師の先入主的誤解を興へはしないかといふことである。之れは今日の小學校に於て、昔日と其の趣きを異にする處大なるものがあるのであるが、その子を愛する幼稚園としては、危懼するも亦已むを得ないところもある。小學校として、科學的眞の把握よりも聊か評價に急なる傾向があつて、この危懼未だ全く安全と言ひ難いところもある。

斯くの如くにして、愛を以て送る幼稚園が、その子の爲に隠さんとするは充分理解するに足るのであるが、同じく教育科學の専門家同志としては、そこをもつて科學的に實行することによつて、國民初等教育の出發を正しからしめることが、極めて必須のことと言はれざるを得ない。

而して、これが實行法としては、客觀的科學的形式に於てするこの有效なると共に、愛を加へたる表現を以て、幼稚園から、小學校擔任訓導に、懇ろに、周到に、教育的に語らるゝことが、最も適切であることが多い。殊に、幸にして幼稚園が小學校と連結されてゐる場合には、之を行ふに最も便利なる機會が提供せられて居り、寧ろ當然の交渉に屬するのである。大都市等に於ては、幼稚園終了者の就學が、甚しく分散的であつて、その實行に相當不便なることもあるが、町村、又小都市に於ては、實行に少しも困難がない筈である。たゞ幼稚園に、その熱意さへあれば出来ることである。但し、理論的にいへば、それは、小學校の方から要求するところでもあり、小學校の方から幼稚園に就て調査したい位のことであるのであるが、そんな順序はさうでもない。さういふよりも、その一人々々の子さへへの愛情からいつても、その就學の幸福に對する責任感からいつても、先づ赴き告げざるを得なくなるのは、幼稚園の方であるべきであらう。

さて、斯様に於て、國民教育就學前の豫備鑑別が、幼稚園によつて普く行はれるに至つた時、幼稚園の國家的存在の意義が、一般的認識の上に確立するであらうし、小學校が幼稚園に俟つところあらんとする態度も、大に加はるであらう。これは、古來往々にして考へられ又行はれてゐる如き、就學前の準備的效果に於て幼稚園の普及を望むよりも、一層教育的に深い意味をもつところでもあらう。少くも、幼稚園と小學校との聯絡の、眞に教育的意義を擧げ得るであらう。

今や、園兒の爲にこれを一般的に實行せらるべき時期に會してゐるのであるが、若し全體的に行ふことが、直には難いとするも、特にその必要の多い幼兒に就ては、是非之れを實行せられたいものである。健康上に就ては、擔任の豫知を得ておかなければならぬこともあるであらう。性格の上に、特に注意して貰ひたいこともあるであらう。更に、家庭事情に就て、教育的にも、その子の心もちを重んずる上にも、耳うちして置く方がいゝこともあるであらう。さういふ場合、小學校の先生に任せて、思ひがけざる誤解や、取り扱ひちがひを生ぜしめたさしたら、それは幼稚園の、その子に對する不熱心として責められても言ひのがれることは出来ない。それらは家庭がする筈ださういふ言ひのがれも出るかも知れないが、家庭の教育的補助者協力者としての幼稚園は、さういふ専門的な役割に於て大に役に立たなければならぬのである。